
Pain & Gentle

大沢崇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Pain & Gentle

【Nコード】

N0294D

【作者名】

大沢崇

【あらすじ】

他班への応援要請を受けて現場へ向かった堂島響と相原双葉。ここでは敵と仲間の死体が重なっていた。古傷の痛みを呼び起こされてしまった双葉を残し、響は単身敵地に入り込む。

(前書き)

銃やらアクションやら、稚拙な部分が多いのです。勉強不足です。

黒装束に拳銃を携え、相棒と共に禁を犯したヒトクイに肅正を与える『組織』のエンジニアント。

冷酷無比な彼等にも、心があつて、痛みもある。

肉体の傷はすぐに治癒するが、心の傷は治りが遅い。

顔を青くして蹲った相方を見ても、堂島は無表情だった。

「2ヶ月ぶりだな」

「覚えてないでよ、そんな事」

いつもの双葉の口調も、強がりになしか聞こえず、こんな時に「こいつも女だったな」と思う。

「歩けるか？」

頷いたものの、双葉は立ち上がるまで10秒近くの時間を要した。通常の双葉ならば拒否するが、青ざめた額に汗を浮かばせる今の彼女にそれを拒む力は無く、堂島に抱き上げられてしまった。

「響…！」

「怪我人は大人しくしてろ」

本来は『病人』と言うべきなのかもしれない。

双葉は度々、右肩に痛みを訴える。それは筋肉や骨の異常ではなく、精神的なものだった。

昔、敵によつて右肩の骨を砕かれた事があつた。

その戦いで仲間が何人も犠牲になり、結果、双葉だけが生き残つた。

自分の盾になつて死んで行つた仲間達。その時、何も出来なかつた自分。

それを思い出す度、古傷が痛むのだ。

最近は落ち着いていたが、やはりまだ、治つてはいなかつたらしい。

堂島は双葉を抱いたまま、肩越しに現場を見た。

『組織』の処理班が犠牲者の回収をしている。彼等が運ぶものは全て、『組織』の仲間の遺体だ。

無惨に引き裂かれた遺体は、堂島の記憶の中にある双葉をかばつて殺された者達の成れの果てに酷似している。

古傷が痛むのも、仕方がない。

難儀なものだと思ひながら、付近に居た部下に目で命じグロリアのドアを開けさせた。

双葉のこのような姿を初めて見たのか、部下は信じられないとばかりに目を見開いている。無理もない。

堂島は助手席に双葉を納める。

「痛むか？」

右肩に触れたが、双葉の反応は無かつた。繰り返される呼吸は浅い。

「暫く休め」

上着を脱いで胸に掛けてやると、双葉は何かを訴える様な目を向けて来た。

その真意を悟った堂島は双葉に告げる。

「今のお前は連れて行けない」

その理由は双葉が良く分かっている。

自力で立ち上がる事が精一杯な状態では、足手纏いになる。

何が出て来るか分からない現場で、動けない者は死ぬしかない。

「現場を見て来るだけだ。敵は南三島達^{ナニツシマ}が殆んど始末してくれたしな」

すぐに戻る。

相方に誓って、堂島は現場　ある組織の研究施設だった建物に向かった。

『だった』と過去系なのは現在の施設の姿による。

コンクリート造りの建物は半分が鉄筋を晒し、半分が鉄筋もろとも崩れ落ちている。

比較的大きな建物だったようだ。

その中ではヒトクイの身体能力を活性化させる研究が行われており、ヒトクイの餌として人間が飼育されていた。

強化したヒトクイを兵隊にして『組織』を壊滅させようとの魂胆があったらしいが、ヒトクイの兵隊は完成を待たずに『組織』に破壊

されてしまった。

今でこそ敵のアジトは崩壊しているが、これが『組織』の本拠地だった可能性もある。

そう考えると、仲間数人の犠牲は「少なかつた」と思おうか。

ただ、この件の担当が最初から自分であつたなら、と考えてみる。散つた仲間より自分の方が力が有ると言うのではない。1つの可能性だ。自分が最初から携わっていたとして、死体になっていたのが自分だつたと言うだけだ。

死体が仲間か自分か。

どちらであつても、結果は変わらないだろう。

堂島は瓦礫の山の前で、歩みを止めた。

「やあ、『組織』のエージェント君」

鼻に掛つた高い声が、瓦礫の山から聞こえた。

それは瓦礫を掻き分けて現れた。

腕の力のみで体を支え、這い出す彼には下半身が無かつた。

灰色の瓦礫を鮮血で染め、内臓を尾のように引き摺りながら、彼は笑つ。

「あれ？1人？」

街で出会つた友人に声を掛けるような口調で、彼は尋ねる。

「『組織』のエージェントって基本的に2人1組じゃん？じゃあ、君は何？1匹狼？アウトロー？」

重傷ではあるが、本人にとっては大した事でも無いのか、彼の口

調は怪我人のものとは異なる。

これが、活性化されたヒトクイの力なのか。

「君が不良でも委員長でも、構わないんだけどね」

彼は右腕を振り上げた。

一般的なヒトクイの右腕より、5倍程太く長い。

その拳が叩き付けられる前に、堂島は袖に仕込んだナイフを放った。

ナイフは彼の右肘の関節を射抜き、瓦礫の山に縫い付ける。

「凄い」

しかし彼は楽しそうで、体半分を瓦礫の山に押し付けた状態で、今度は左腕を振り上げる。

右腕の大きさに反して左腕はレギュラーサイズだが、指が伸びるらしい。

触手と化した彼の指は堂島に絡み付こうとするが、手首の関節を捕えられてしまう。

「完敗っばいなあ」

ナイフによって両腕の自由を奪われても尚、彼は笑みを絶やささない。

「ね、パイソン357マグナムとデザートイーグルは使わないの？」

グロリアの双葉に上着を預けた事により、シヨルダーホルスターが露出している。

『組織』の制式採用拳銃はシグ/ザウアーP220だが、堂島は

パイソン357マグナムとデザートイーグルを携帯していた。

どちらも知人から譲り受けた物で、ただの道具だと理解しながら、その他多数の道具と同等には扱えなかった。前の所有者を思い出し、てしまうのか、それに伴う相手の心境を懸念してか。どちらにしても仕事には全く関係無いのだが。

「銃は良くない」

堂島は初めて彼に対して口を効いた。

彼はそれが嬉しかったのか、目を輝かせた。

「そうなの？へえ。やっぱり、扱い難いの？パイソンはね、熟練した腕が必要だつて本に書いてあつたし、デザートイーグルは滅茶苦茶重いでしょ？でも凄いな。そんな大きい拳銃2つも吊してる人初めて見たよ」

そこまで喋って、彼は沁々と目を細めた。

「僕はおかしいんだと思う」

お前がおかしくなければ何がおかしいんだ。

そう思えども口には出さない。

「僕は本当は女の子が好きなんだ。柔らかくて、甘くて、良い香りがする女の子。人間だったら最高なんだけど、ヒトクイも結構癖になる味なんだよね。でもね、」

彼は口から舌先を見せる。舌はズルズルと伸びて、1メートル程の長さになった。

「君から凄く美味しそうな匂いがするんだけど、血液だけでも舐めさせてくれない？」

彼は舌先を尖らせて堂島に向ける。最早『舐める』ではなく『突き刺して血をすする』つもりだろう。

生憎、此方は食用ではない。

堂島は3本目のナイフを放つ。舌先ではなく、舌の中程を狙って彼はナイフから逃げようと舌を引く。しかしナイフは速く、既に舌に突き刺さっていた。

ナイフに射られたまま無理矢理舌を引き戻した為、舌は縦に割れる。

「ギヤアア　　！！！」

まだこれ程の血液があつたのかと驚く量の血液を噴き上げ、彼は悲鳴を上げる。のたうち回ろうにも両腕が固定されている為に叶わず、ただ叫ぶばかりだった。

彼を見下ろして、堂島は悲鳴を聞き付けて現れた処理班に言う。

「収容しろ」

敵の研究成果とやらを、『組織』の研究員達に見せてやれ。

エージェント達はそれに従い、彼の回収作業を始める。拘束具を着せて、猿轡を填めようとした時、

「待つてよ」

彼は割れた舌を一生懸命動かす。

「最後に1コ教えてよ。何で、銃使わなかったの？」

どうせ死んじゃうんだし、良いでしょ？冥土の土産ってヤツにさ。基本的に業務外の事はしないが、彼の言い分も分かる。冥土の土産。それも悪くないだろう。

「あいつは銃声を聞き分ける」

「アイツ？」

「相方」

「銃声嫌いなの？」

「デザートイーグルは特に。死んだ奴を思い出すらしい」

「ふうん。優しいんだね」

「優し過ぎて困る。優しさは仕事の邪魔になる」

「相方さんじゃなくて君だよ。僕がいつぱい君の仲間を殺したら、相方さんは泣いてるんでしょ？」

肯定はしなかったが、否定もしなかった。

連れて行けと処理班に告げ、自分は単身外へ向かう。

車体に寄りかかるようにして、双葉がグロリアの外に居た。

「何かあった？」

相変わらず青白い顔をした双葉からの質問に、何も、と返し運転席側のドアを開ける。

「戻るぞ。あとは処理班に任せて良い」

「響」

助手席に身を納めて、双葉はうつ向いたまま言った。

「おかえり」

「ああ」

仲間や相方に自分の盾になって死なれるのを嫌う双葉にとって、堂島の無事は何よりも喜ばしい事で、あと1分戻るのが遅ければ言う事を聞かない我が身を引きずってでも参戦していた。

そんな双葉の性格故、堂島は双葉より先には死ねない。

そして堂島自身のプライドが、双葉に自分の死体を晒す事を許さない。

しかし、双葉を先に逝かせたくもなかった。

死ぬ時は一緒だと言えるならば良いのだが、生憎、それ程深い仲間でもない。

「只今」

ただ、生きて相方の元に帰って来れるだけで充分なのだ。それが出来なかった者を思い、双葉は苦しむ。

せめて自分は、それをしてやらなければ。
自分くらいは。

堂島はグロリアを走らせた。

上着は双葉の腕に抱かれているので、相変わらずシヨルダーホルスターは晒されている。

双葉はハンドルを握る堂島の手に、血痕を見付けた。

小さな点である。

血しぶき？

返り血？

嗚呼、やはりあつたのか……。

双葉は堂島が離れていた数分間の出来事を悟った。

銃声は聞こえなかつたけれど。

また、気を遣わせてしまった。

双葉は喉元まで出掛けた憂鬱の息を飲み込み、冷たい窓に頬を当てた。

目頭が熱い。

いい加減、この弱い精神に腹が立つ。

ぼつり、と1つ窓ガラスに雫が落ちた。

「雨ね」

雫は1つ2つと続き、速度と量を増す。降り始めて間もなく、土砂降りになった。

涙雨。

現在の心境からして、まさにそれだと思いながら、瞼を閉じた。
号泣する空の音と、それに隠されるグロリアのエンジン音。 仲
間の死体などもう2度と見せてくれるなど祈る双葉の心に反し、携
帯電話は無情にも、非情な内容の着信を知らせた。

了

(後書き)

メール一通にまとめなくても良かったのですね。小分けにして連載にした方が読みやすかったでしょうに……。今気付きました。

銃はスニーカー文庫の『ファントム』を読んで決めました。きつと響さんは通常モードで拳銃携帯。滅殺モードで大銃とシヨットガンなのだろうな、と妄想の末に結論が出ました。

諸々と妄想をしつつ、今は『ヒトクイ』の続編を待つばかりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0294d/>

Pain & Gentle

2010年10月22日00時42分発行